

講演会・シンポジウム報告

グローバル言語教育研究センター (RCGLE)

2020 年度講演会

講演会「大学ライティングセンターのニュー・ノーマル —個別相談によるライティング支援に焦点をおいて—」

日時：2020 年 10 月 10 日 (土) 10:00-12:30

形式：Zoom によるオンライン開催

参加人数：200 名

講師：飯野 朋美 氏 (津田塾大学ライティングセンター客員講師)

話題提供：相場 いぶき (国際基督教大学グローバル言語教育研究センター特任助教)

講演の概要 (公示用ポスターより抜粋)

本企画では、まず、オンライン化を迫られた各地の大学ライティングセンターの 2020 年春の動向と ICU の実践を報告する。その上で、講師の飯野朋美先生 (津田塾大学) に、プロセスを重視したライティング支援についてご講演いただき、大学におけるアカデミック・ライティング支援の可能性と課題を、個別相談に焦点をおいて考えたい。

第 1 部 「大学におけるライティングサポートのオンライン化の動向と ICU における実践」

話題提供：相場いぶき (国際基督教大学)

第 2 部 「プロセスを重視したライティング支援—津田塾大学ライティングセンターでの実践例から」

講師：飯野朋美 (津田塾大学)

意見交換

〈報告〉

本講演会は当初「大学におけるライティング支援の可能性を探る」という 2 回にわたる連続講演会の一つとして予定されていた。しかしコロナ禍における対面開催が困難となったため、一方を来年度に延期し本講演会をグローバル言語教育研究センターにとって初となるオンライン開催とした。第 1 部では、相場が日本における大学ライティングセンターの概要とオンライン化の動向、ICU ライティングサポートデスクの取り組み、オンライン化に対する学生の意見を紹介し話題提供を行った。第 2 部では、飯野氏が津田塾大学ライティングサポートセンターの実践例を挙げ、「自立した書き手を育てる」という理念に基づくプロセス重視の個別支援について説明した。その後参加者からの質問に飯野氏と相場が答える形式で質疑応答が行われた。

オンラインでの講演会開催に際し、トラブル発生時に十分な対応ができるよう当初は参加者を 50 名に絞っていたが、実際は 250 名近い申し込みがあった。質問も数多く寄せられ、大学ライティングセンターのオンライン化、およびライティング支援で優れた成果を上げている津田塾大学の取り組みについて、多くの大学教員が関心を持っていることがうかがえた。また、本学ライティングサポートデスクとの関係構築を望む声も寄せられたことから、今後の情報発信や大学間のつながり強化の重要性をより一層実感する機会となった。日本の大学におけるライティングセンターが活発に動き出したのはここ 10 年程度のことであり、多くの大学がその在り方を模索しているのが現状である。急激な授業のオンライン化に伴い、ライティング支援の役割を再考することは必要不可欠であり、本講演会がその一助となったことは大きな成果である。

(文責：相場いぶき)

連続講演会「タスクに基づく言語教育の理論と実践」
第一回講演会「効果的なタスクベース授業の作り方」
第二回講演会「効果的なタスクベース授業の作り方 その2」

日時：① 2020 年 12 月 1 日 (火) 9:00～9:45、② 2021 年 2 月 13 日 (土) 9:00-10:00

形式：①②ともに、レクチャーは動画を配信、質疑応答はオンラインのライブセッション (Zoom を利用)

参加人数：① 81 名、② 77 名

講師：笹山 尚子 氏 (米国 Educational Testing Service 研究員)

講演の概要

本企画は、第二言語教育における TBLT (Task-Based Language Teaching) の中でも、特にタスクデザインに注目し、「これまでに蓄積されてきたタスクデザインに関する研究結果 (エビデンス) を、実際の授業に活かすには？」をテーマとして、効果的な授業の作り方を検討する連続講演会である。

第 1 回講演会では、個々のタスクのデザイン法から、それを組み合わせて作るタスクベース授業の作り方で、実践例も交えながらご紹介いただいた。

第 2 回講演会は、「タスクを使ったアセスメントの効果的実践法」と「言語能力レベル別に見る効果的なタスクベース授業の作り方」という 2 部構成で、タスクの具体例の分析などを交えてご講演いただいた。

〈報告〉

この連続講演会の目的は、第二言語教育における TBLT (Task-Based Language Teaching) の中でも、特にタスクデザインに注目し、タスクデザインに関する研究で得られた知見を実際の授業に活かして、効果的な授業設計を検討することであった。

本企画はオンラインで開催したが、講師の滞在先との時差や、長時間のイベントが参加者に与える負担を鑑み、各回とも講義部分は動画を事前配信するウェビナー形式とし、質疑応答セッションのみ Zoom で開催した。参加者募集の告知を開始したところ、予想をはるかに超える関心が寄せられ、いずれも応募開始当日にはほぼ満席となる盛況ぶりだった。オンラインで参加できる形式であったことから日本国内外から参加申込みがあったことも嬉しいことであった。

当日は、対象言語を問わず多くの言語教育関係者にご参加いただいた他、言語以外の科目の担当教員、年少者らへの継承語教育・学習支援に従事している方など、参加者層は多様であった。参加者の満足度は高く、もっと学びたくなったという声をいただき、また、英語教授法の学生にもウェビナー動画を見せたいというご要望もいただいた。

参加者には本学の日本語教育・英語教育・世界の言語などの言語教育プログラムの教員、高校教諭、学部生・大学院生など本学所属の参加者も一定数おり、本企画が ICU 内部において言語教育・言語教育研究の共通認識構築の一助となったことが期待できる。また、TBLT に関心を持つ学内外の関係者がネットワークを築ききっかけにもなったのではないだろうか。

最後に、講師の笹山氏、そしてご所属先機関である米国 Educational Testing Service のご厚意で、ウェビナー動画や配付資料をウェブサイトにおいて一般公開する許可をいただき、講演会の内容を参加者以外の多くの方に見ていただけることになった。この場を借りて、笹山氏ならびに ETS に心から感謝申し上げたい。
(文責：小澤伊久美)

グローバル言語教育研究センター (RCGLE)

2020 年度連続講演会

連続講演会「多様な言語的背景を持つ日本語話者の『読み』を考える」 第一回講演会「日本国内在住の文化的・言語的に 多様な子ども (CLD 児) の読書力の発達」

日時：2020 年 12 月 5 日 (土) 13:00-17:30

形式：Zoom によるオンライン開催

参加人数：143 名

講師：櫻井 千穂 氏 (広島大学大学院准教授)

講演の概要

日本国内で言語的マイノリティの立場におかれる文化的・言語的に多様な子ども (CLD 児: Culturally Linguistically Diverse Children) のことばとアイデンティティの発達を保障するには、どのような教育環境を築く必要があるのだろうか。その答えの一端を探るために、この子どもたちの複数言語能力の実態に迫ってみたい。

国内在住の学齢期 (小学 1 年生から中学 3 年生) の CLD 児 (ここでは、日本生まれの中国ルーツの子どもたちと南米スペイン語圏の子どもたち) の日本語と母語 (家庭言語) の読書力の達について、「JSL 対話型アセスメント (JSL: Japanese as a Second Language)」のもととなった評価ツールを使って実施した調査から見えてきた CLD 児の言語能力の実態 (日本生まれの CLD 児の日本語読書力の特徴、二言語の会話・聴解・読書力との関係) について発話データを用いながら紹介する。

〈報告〉

本講演では、日本国内在住の外国にルーツを持つ、多言語多文化環境で育つ子ども (CLD 児) を対象に読解力の研究を実践しておられる広島大学大学院准教授の櫻井千穂氏をお招きし、日本国内で多言語環境の中で育つ子どもたちの現状、二言語能力獲得のための教育 (バイリンガル教育) の理論、「読み」と二言語の関係について、氏が実施している調査をもとに、調査結果とそこから見えてきた課題、さらに、教育的示唆と実践的な読解指導の方法に関して講演をしていた。講演会は、1) 日本生まれの CLD 児の日本語読書力、2) CLD 児の二言語会話、聴解、読書力、3) 学校でできる教育実践、の 3 部構成であった。

今回の講演は、日本在住の CLD 児童生徒を取り巻く背景を理解すると共に、日本における外国にルーツを持つ子どもたちの抱える問題を「読解力」という観点から考えるよい機会となった。また、日本語母語児童と比較した調査結果を知ることにより、CLD 児たちが読解において抱える課題やその要因の一端を知ることができた。さらに、氏の実践に基づいた教育的指導や支援の方法も紹介していただき、これからの本学における継承語日本語コースの指導方法について考える一助となる講演会であった。また、今回は、オンライン開催ということで、日本国内はもとより海外からも多くの参加があった。当初は定員を 100 名としていたが、告知開始後すぐに定員を超えたため、急遽 150 名まで参加可とした。参加者の所属を見ると、国内外の大学だけではなく、多くの初等、中等、高等教育に携わる方々にも参加していただいたことがわかる。研究者だけでなく、実際に CLD 児の教育に携わる方々の参加が多かったのも今回の講演会の特筆すべき点だと言えよう。この講演会は、様々な角度から CLD 児に関わっている、多様な教育機関で働く方々にとってその研究に携わる専門家からの知見を得る貴重な機会となったのではないかと。

(文責：藤本恭子)

連続講演会「多様な言語的背景を持つ日本語話者の『読み』を考える」 第二回講演会「多様な言語的背景を持つ CLD 児の『読み』を探る —日本語母語児童の読み書き能力の習得過程との比較から—」

日時：2020 年 12 月 6 日（日）13:00-16:00

形式：Zoom によるオンライン開催

参加人数：130 名

講師：高橋 登 氏（大阪教育大学教授）

講演の概要

読解力とはどのようなものか。また、子どもたちはどのようにして読解力を見つけていくのか。日本語を母語とする子どもたちの読解力の発達過程を手がかりにしながら、CLD 児（Culturally Linguistically Diverse Children）の日本語の読み書き能力の発達について考える。最初に母語児を対象とした学童期の読み書き能力について、読解力とは何か、学童期に身につける語彙とはどのようなものか、語彙と漢字との関係から考える。また、母語児はどのように読解力を身につけていくのかについて紹介する。次に、こうした日本語の力を測るために開発した適応型の言語能力検査について説明する。これらのことをふまえた上で、海外の日本語補習校に通う子どもたちだけでなく、日本国内の公立学校に通う CLD 児の読み書き能力の特徴についても考えたい。

〈報告〉

本講演では、児童の読み書きの発達に関する調査を実施している大阪教育大学教授の高橋登氏をお招きし、子どもの言語能力と読解力の関係について説明していただくとともに、多言語多文化環境で育つ子ども（CLD 児）である、継承語としての日本語を学ぶ子どもたちの読み書きを学ぶ過程での現状や課題についてご紹介いただいた。氏の講演を通して、読解力とはどのようなものか、学童期の子どもたちはどのようにして読解力を身につけていくのかを学ぶことができた。また、日本語を母語とする子どもたちの読解力の発達過程を知ることにより、CLD 児の日本語の読み書き能力の発達について考える良い機会となった。さらに、氏らが開発した言語能力検査とそれを使用した調査の結果によって示唆された海外の日本語補習校に通う継承語日本語話者や日本国内に住む CLD 児の課題についても知ることができた。

また、前日に開催した連続講演会の第 1 回講演会同様、オンライン開催ということで、日本国内はもとより海外からも多くの参加があった。参加者の所属先を見ると、国内外の大学だけでなく、多くの初等、中等、高等教育に携わる方々にも参加していただいたことがわかる。研究者だけでなく、実際に継承日本語話者である児童や CLD 児の教育に携わる方々の参加が多かったのも今回の講演会の特筆すべき点だと言えよう。この講演会は、様々な機関において継承日本語話者である児童や CLD 児に関わっている方々にとって、児童の読み書きの発達の研究に携わる専門家からの知見を得る貴重な機会となったのではないかと。また、連続講演会は二日間の講演会であったが、両日とも参加している方が多数おられた。この点からも、「多様な言語的背景を持つ日本語学習者の『読み』を考える」という今回の講演会のテーマが学外においても関心の高いテーマだったと言えるのではないだろうか。本学においても本講演会で得た知見・課題を継承日本語コースでの指導に活かしていきたい。

（文責：藤本恭子）

グローバル言語教育研究センター (RCGLE) 2020 年度連続講演会・ワークショップ

連続講演会「タスクに基づく言語教育の理論と実践」 第三回講演会「言語教育における内容言語統合型学習 (CLIL) : Soft-CLIL の英語授業の事例」

日時：2021 年 3 月 11 日 (木) 13:30 ~ 15:30

形式：オンラインのライブセッション (Zoom を利用)

参加人数：43 名

講師：和泉 伸一 氏 (上智大学外国語学部英語学科・言語科学大学院教授)

講演の概要

本企画は、第二言語教育における TBLT (Task-Based Language Teaching) と関係の深い CLIL (Content and Language Integrated Learning) の考え方を使った英語授業のレッスンのあり方を検討した。

CLIL は、より言語教育重視の "Soft-CLIL" と、より内容教育重視の "Hard-CLIL" に分類することができるが、当日は英語科授業を念頭に Soft-CLIL に焦点を当ててお話いただいた。また、参加者が学習者役となってタスクを体験できるような模擬授業の要素を組み込み、Zoom の Breakout rooms を多用したペアワークを取り入れるなど、一方向的な講義ではない、インタラクティブで体験的な形で進行して下さった。

〈報告〉

本講演会では、第二言語教育における TBLT (Task-Based Language Teaching) と関係の深い CLIL (Content and Language Integrated Learning) の考え方を使った外国語の授業のあり方を検討した。まず、CLIL は、より言語教育重視の "Soft-CLIL" と、より内容教育重視の "Hard-CLIL" に分類できるが、コース全体、あるいは 1 時間の授業全体を全て同じタイプの CLIL でデザインするだけでなく、学期を通して組み込む頻度を変えたり授業内での比重を変えたりするなど、学習者にあわせて様々な工夫ができるといった講義があった。その上で、英語科授業での Soft-CLIL を想定した様々な活動を、参加者が体験できる形でご紹介下さった。

講義では、「文章が簡単だからと言って、課されるタスクがつまらないとは必ずしもならず、簡単そうな文章でも、どこまでタスク化して言葉の学習も内容の学習も入れ込んでいけるかが示せる」というお話があったが、模擬授業ではそのことを、英語のレベルが比較的易し目の教材を素材にした具体的なタスクにして参加者に体験させて下さった。タスクの中には批判的思考への足がかりや学習者が自ら学びたいと思う自律型学習の支援としてのタスクも組み込まれており、それらのタスクを一人で、またペアワークの形で体験できた他、CLIL の授業における Teacher talk の重要性を体験することもできた。また、模擬授業では Zoom の Breakout rooms を多用したが、2020 年度にオンライン授業を展開してきた参加者にとって、学習者として Breakout rooms を利用した授業を体験し、利点や留意点を考える良い機会にもなったようだ。

参加者は、日本国内外に居住する、英語・日本語・韓国語をはじめとする様々な言語の教育に従事する教員や研究者、教員を目指すもの、年少者らへの継承語教育・学習支援に従事する者などであったが、教授対象言語を問わず、TBLT や CLIL を初級の語学のクラスでどう実施するといったかを具体的に知りたいという教師側のニーズに応える講演会であり、かつ、語学の授業の可能性を広げる実践的な示唆を多くご教示いただいた講演会であった。

なお、講師の和泉氏と参加者のご厚意でウェビナー動画や配付資料をウェブサイトにおいて一カ月間公開する許可をいただいた。この場を借りて心から感謝申し上げたい。

(文責：小澤伊久美)